

オンラインによる連続企画として行われた今回の教育講演会。各講演において、それぞれの先生方からは、今後目指すべき方向性が語られました。それは、コロナ以前に戻すのではなく、新しい方向です。その方向性をまとめながら、全5回の教育講演会を振り返ります。

第1回 座談会「教育の不平等と学校の役割」

話題提供：清水睦美氏（日本女子大学教授）

- ・教育内容をめぐるレリバンス（関連性・意義）を支える学びの土台・学校の再分配機能として、
「今・ここに存在することの意味」を子どもたちに伝える。
- ・少人数前提の包摂を基準とするインクルーシブな集団へ

第3回 講演会「なぜ少人数学級が必要なのか」

講師：本田由紀氏（東京大学大学院教授）

- ・垂直的序列化（子どもたちを細かく序列化する縦の評価軸）と水平的画一化（特定のふるまい方や考え方を全体に要請する圧力）の特性を弱め、日本の教育に過小である水平的多様性の拡充へ。
- ・個別学習と協働学習の組み合わせ、
- ・合科学習・異学年学習・探求学習・発展学習などの柔軟な適用
- ・そのための少人数学級とICT教育の必要性
- ・高校の学科、コースの多様化、進学可能性の確保

◎目指すべき方向

- ・誰もがそれぞれに尊重され、可能性を発揮することができ、安心して生きていける社会
 - ◇「今とは逆の社会へ」
 - ◇そのための教育の変革へ
 - ◇鍵となるのは「水平的多様性」

第5回 講演会「コロナ禍で考える未来の社会と教育」

講師：岡野 八代氏（同志社大学教授）

今わたしたちがしなければならないこと

- ・・・・ケアのなさに抗して
- ・「自助」では、家族は持続可能ではない。
- ・「家族」に押しつけられた労働を社会で分担しなければ、そしてその価値を評価していかなければ、その労働分配をめぐる不平等は、ジェンダーや人種、移民差別を維持し続ける。
- ・ケアをめぐる価値が低いままだと、ケアを担う人たちの政治的・社会的発言力も低いまま、他方で、政治は「無責任な特権者」によって独占され続けてしまう。

第2回 講演会「教育においてICTを飼いならすために」

講師：石井英真（京都大学教授）

- ・リスクをとり挑戦できる自由な学校へ
- ・災害に強い学校、これまで救えなかった子を救える学校へ
- ・オンライン化に向けた条件整備をやり切る
- ・「小さな学校」と「大きな学校」の狭間で新たな学校像を展望
- ・オンライン学習で問われているのは、テクノロジーの質以上に、授業観
＝学習者目線で考えられているか？
- ・「こころの温度」を上げる授業を
→教科の内容の本質を見極め、子どもの生活と結びつけ、手持ちのツールを最大限に生かすところに、ちょっとした工夫であっても、彩のある授業が生まれる
- ・オンライン学習で問われる授業づくりのコンセプトと発想
- 「授業」（わかるように順序だてて内容を教え授ける技術）から「受業」（自ら内容を修める学び方）へ
の出発点の転換がポイント

第4回 座談会「偏見・差別・自粛警察を考える」

話題提供：山口 毅氏（帝京大学准教授）

- ・学びの結果がライフチャンスを左右するような社会をやめるための手立てを考える。
- ベーシックインカムなどによって無条件に生を保障する社会がひとつの目標になるだろうし、学力をめぐる競争と切り離されたケアの実践を学校現場で広げることも肝要

学校現場は、日々変わる現状への対応に追われていますが、子どもたちや家庭が置かれている状況、教室の存在意義、これからの授業の形を、落ち着いて考える必要があると思います。